

釧路の工業発達過程（Ⅰ）

——明治期を中心に——

寺 島 敏 治*

On the Development Process of Industry in Kushiro I
—— especially in the Meiji period ——

Toshiharu Terashima

1. はじめに

昭和32年、渡辺 茂編『釧路市史』が刊行された。第7章が工業であるが、いわゆる事始めに力点を置いた構成で、時間不足の作業のせいか、他の商業や鉱業に比較して、紙幅もすくなく釧路の工業発達過程は理解できなかった。

昭和40年代後半に共同分担執筆方式で『新釧路市史』（全4巻）が順次刊行される。昭和48年2月『新釧路市史第2巻』産業経済篇が世に出る。この第2巻で第3章の林業から第6章の工業まで私が担当した。この6章工業は他の章と異なり、釧路の工業を時系列を基本とする構成ではなく、工業の各業種別の構成記述とした。この構成では各業種別の内容は理解できるものの、各时期的な工業の発達過程が不鮮明となり、いわゆる歴史像は把握されにくい。また釧路の発達過程の追求は、単に釧路の部分だけでは把握されない。その時どきの景気変動はもちろんの事、資本の性格、原料の入手経路、製品、半加工品の販路などでもいわゆる内地ばかりでなく道東各地と地域的な関連が深い。それで他地域との比較研究で地域格差や質の違いも浮きぼりにするためにも、これを時系列を主軸にして組み変えて構成する作業をはじめたのが本文である。ここでの主たる対象時期は産業資本が形成され確立して行く時期、さらに次の段階に変質していく明治期全体とする。また対象とする工業の業種は紙・パルプ工業、木材工業、造船業、造機工業に含まれる小規模な鉄工業、水産加工業等の単純加工の手工業から工場制機械工業までである。

2. 時期区分

釧路における明治初期以降、敗戦までの時期区分を次のようにする。

第1期、日清戦争を経て明治32年まで。（前田製紙工場建設前まで）

第2期、明治33年より同38年まで（前田製紙生産開始から、日露戦争後、富士製紙第四工場となる以前まで）

第3期、明治39年より同44年まで（本格的な水産加工場誕生まで）——以上本号——

第4期、大正初期より第一次大戦末の大正8年まで（大正2年の製紙工場焼失から鳥取での工場建設をし生産再開直前まで）

第5期、大正9年より大正末期まで（富士製紙の生産再開以降）

第6期、昭和初期より同7年まで（富士製紙と王子製紙の企業合併まで）

第7期、昭和8年より同12年まで（新田練乳工場の誕生から極東練乳と北連工場の並列操業まで）

第8期、昭和13年以降より同20年まで（日中戦争開始以降、企業整理統合から敗戦まで）

以上、釧路の工業をみるために第1期から第8期まで時期区分をしたが、これは全道的に見ても先学の成果で合致するものである。つまり、さきの第1期は1時期とする事ができるが、⁽¹⁾共通的な要素から、全道的に見てもこれまでの水産物が、農業生産物にその首位の座をあげわたした明治33年以降の第2期から大正8年までの第4期までを1時期とする事ができる。

大正9年には全道的に工産物量が農産物生産量を追い越す第5期の、いわゆる戦後恐慌から恐慌期を経て景気の上向きだった第7期までで1時期を画する事ができる。

この時期は前の時期末に第一次大戦期の好景気の中で、生産量が急増した結果、農産物よりも工産物量が首位となる事に起因している。しかも前の時期から北海道ではいわゆる重工業と軽工業がおおよそ同一歩調で発展していく事に注目してよい。最後は第8期で、企業統合から臨戦体制へ、さらに敗戦までである。

* 釧路市立郷土博物館

3. 各時期における具体相

第1期

ここでは明治初期より日清戦争を経て、前田製紙建設以前までの時期を主たる対象とする。この時期の釧路はいわゆる内地より必要な食糧品及び雑貨品の海路移入が主脈であった。したがって地元・釧路では伝統的な技術により、小規模な生産がおこなわれていた程度である。

明治10年代は知人からオダイト、一部トンケシにかけて魚粕を中心にごく小規模な形で水産加工品を生産していた。明治20年代になると、小規模な醸造業と10年代同様の漁撈部門と一体となった水産加工品を生産するようになった。醸造では地元需要に応ずるため、愛北物産会社（真砂町）、須田醸造（幣舞町）、酒井酒造（米町）の三か所⁽²⁾があり、いずれも名古屋や山形県新庄など本州の伝統的な技術を持ち込んで小規模な地酒づくりをおこなった程度である。



第1図 愛北物産会社（北海立志図）

いっぽう浜では地曳網等の漁業とまったく未分化のまま水産加工がおこなわれていたに過ぎない。また製材のためごく小規模な木挽所が地元需要に応じている。

ところで明治23年、釧路港は輸出硫黄や昆布出荷のため、特別輸出港に指定され、移民の増加があったものの基本的には生活必需品である食糧品のほか加工品の移入増等があったが、前述のような状態のままで明治30年代をむかえる事になる。

第2期

この期は釧路の天寧に工場制工業システムを導入した前田製紙の工場建設から、同工場が富士製紙第四工場となる以前までをみる。この時期には鉄道が部分開通していき、帯広—釧路間が開通する。このような社会情勢の変化によって、30年代をむかえると釧路の工業も様相が一変する。

まず醸造業であるが、明治34年白糠まで鉄道が部分開

通した年に年間700石の酒、味噌、醤油、油などを生産する尾崎酒造が誕生した事である。この地元メーカーは鉄道などで釧路、さらに十勝方面まで営業範囲を拡大する事を目論んだものである。さらに翌35年、年間450石の味噌、醤油の生産をする事で釧路管内を市場とした納谷醸造が営業を開始したことである。

いっぽう製材工業の面でも鉄道枕木及びマッチ軸木など木材半加工品及び製品の輸出増にともない、明治35年これまでの釧路木挽所の規模を大きくした釧路興業株式会社釧路製材所が挽材とマッチ軸木の生産を開始する。

またその二年後の明治36年マッチ軸木専業生産の草野製軸所が、釧路川筋茂尻矢で生産をはじめめる。この製軸所は全道的な軸木生産の最盛期の波にのり、釧路港から移出を目論み、草野新太郎の手によって起したものである。

この工場は輸入機械であるドイツ式6列剥機を5台、同式4列剥機7台を持ち、それを30馬力の蒸気機関で動かした。原木は軸木原木であるシナ丸太を使い、軸木生産に男女工員が汗を流している。

この時期に特筆しなければならない事は、近代工場制工業としての規模を持った製紙業の勃興である。それは明治33年、公称20万円で設立が急がれた前田製紙合資会社である。この工場は前田正名らが中心となり、亜硫酸パルプを製造・販売するために、釧路村天寧に建てられた。

工場立地の条件としては工場の南東は北見道路に面し、北西は釧路川を背に敷地1万2千坪を持ったもので、①釧路川と阿寒川の西河川流域のエゾ・トド松などパルプ用原木が豊富で得やすいこと。（これは釧路川流域の別保国有林及び阿寒川流域国有林から年期契約で大量の払下げを実施している。）②さらにこの二大河川を使つての木材流送により、原木搬入が容易であること。⁽⁴⁾③また製品を釧路港より船積みするための地理的条件が整っていること。④将来、鉄道・釧路線の全面開通で貨車による原木搬入が十分可能であること、などがあげられる。



写真1 前田製紙工場

工場は5棟の建物からなり、4棟が平家で1棟が2階建であり、その坪数は555坪である。工場の原動力はまだ電動機ではなく、100馬力の蒸気機関であったから、この燃料炭は別保炭山など近くの炭山より調達した。労働者は100人近くいたのである。

明治34年操業を開始しパルプ生産をしたが、年末には生産したパルプが不良であるとの事で、発送した製品の販売上の目途がつかず倒産に追い込まれた。

この倒産した前田製紙を富士製紙株式会社が資金を投入し、明治35年1月から北海紙料株式会社と改称して生産を再開した。北海紙料になってからの職工は前田製紙の段階より40名ほど増え、昼夜二交代で亜硫酸パルプ生産に従事した。この工場が正式に富士製紙株式会社第4工場となるのは、日露戦争後の明治39年のことである。

化学工業の一ジャンルであるガラス工業では明治37年白井ガラス工場が操業をはじめた。ここでの生産は無動力で職人が5人ほどいる小規模なものであるが、ガラス浮き玉など漁業及び地元需要に対する生産であり、釧路的な特色がうかがえる。

明治30年の北海道国有未開地処分法の施行によって、大きな河川流域の中流域林が払下げられ、私有林化していく。すでにこの事は別稿で詳述しているが、釧路も例外ではなく、釧路川の川口・知人の漁業家である前田栄次郎などは釧路川・中流域林に属する岩保木——トリトウシ山林を前田牧場として払下げる。この牧場取得は前田の漁業経営のため、磯舟材確保と漁場使用馬の保管のためのものである。このように釧路在地の者ばかりでなく、不在地主も国有山林を私有林化し、企業的目論みを進めるのである。このような私有林の形成は前田のような漁業のための自家用の目的のためばかりでなく、原木確保のため造材——製材工業とも関連している場合が一般的である。

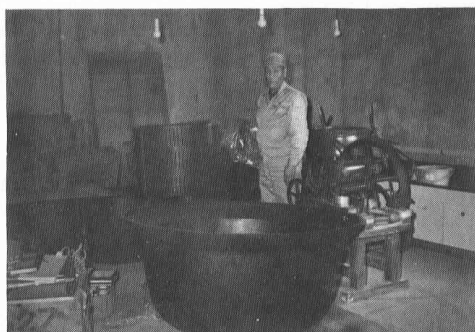


写真2 ニシン釜（釧路市立郷土博物館収蔵）

水産加工の面では前の時期と同様に、まだ漁撈部門と加工部門が未分化のまま、加工部門が漁獲量の増加に伴

なって多少増えた程度である。鯨その他の魚が大量に漁獲されると、大釜で魚を煮て鰯胴と呼ばれる木製の圧搾器で締めてまず魚油を取り、水分をとったものを天日で乾燥し魚粕とする。これらの製品を業者が集荷し、内地の米作地帯へ販売したのである。また冬は魚の塩蔵、干物の単純加工をしていた程度である。

また釧路川以東の岩浜海岸の昆布採集村では、海草を天然乾燥させたものを焼いて、工業用の素沃度をとる単純加をさかんにおこなっている。これは零細漁家の唯一の現金収入として普及したのである。⁽⁷⁾

第3期

ここでは日露戦争後の明治39年富士製紙が資金を投入してきた天寧の製紙工場を富士製紙では正式に第四工場とした時期から、明治44年鈴木水産工場が開業するまでの期間を対象とする。

この時期には釧路、函館間の鉄道全通による移民の増加と相まって、明治42年当時の釧路町で大懸案であった釧路港建設が具体化し、翌43年釧路土木事務所が設置され、工事が開始された。木材の輸移出の増加及び一部沖合漁業の発達等により、従前からの製紙及び木工業のほかに、小規模な鉄工所群の発生と本格的な水産加工業の進出・成立をみたことが特徴である。工業のベースになる事でふれたい事は明治40年9月資本金1万1千円で、小規模ながら釧路電気株式会社が設立されたことである。このタービンは410馬力のもので、電力を供給したのである。

以下具体的に見る事にする。

まず製紙であるが、日露戦争を契機に新聞紙の需要がにわかに増加しただけでなく、紙の消費量をも急増させた。

この結果、輸入パルプ等で急増をしのぐ現象さえあらわれた。そこで王子、富士、四日市、九州製紙など大手製紙資本はパルプ・紙の生産増をはかるため、新工場の建設に着手したのである。もちろん富士製紙も国内の需要はもちろんの事、支那・朝鮮市場へも輸出する目的で、明治39年資本金を1千万円とした。同年、本道へ新工場建設に着手したのである。明治41年には第五工場を江別に、第六工場を金山に建設し操業をはじめた。金山工場は江別工場に供給すべきパルプを生産し、釧路工場を第四工場とし、パルプ及び新聞紙・洋紙の生産を担当した。第五江別工場は洋紙と新聞紙の製造をする。⁽⁸⁾

一方、富士製紙と共に道内へも進出した王子製紙は、明治43年苫小牧工場を建設し、同年よりパルプ、洋紙、新聞紙等の生産を開始している。

第1-A・B表は明治39年以降、同44年までの北海道における富士、王子製紙の紙・パルプの全生産量及び販売量（明治41年以降）をしめしたものである。同A表でわかるように、富士製紙の場合、明治39年 300万ポンド台であったものが、2年後の明治41年には10万ポンド台で3.2倍、42年には2.6倍、43年には6.3倍、44年は5.9倍と増加の一途をたどっている。一方、大型工場を建設した王子製紙は操業翌年には29万ポンドの生産をするにいたる。

第1表 (A・B)

(A) 明治末期の北海道における富士、王子各製紙の紙、パルプの生産量

	富 士 製 紙	王 子 製 紙
明治39年	3,178,231 (ポンド) (1)	—
" 40年	3,073,350 (") (0.96)	—
" 41年	10,232,964 (") (3.2)	—
" 42年	8,383,479 (") (2.6)	—
" 43年	20,287,216 (") (6.3)	8,193,042 (ポンド) (1)
" 44年	18,902,373 (") (5.9)	29,869,306 (") (3.6)

「北海道工業概況」(大正2年) p 24~25で作成。()の中の数字は富士製紙、明治39年を1とした場合の生産量倍数、王子製紙、明治41年を1とした場合の生産量倍数

(B) 明治末期の北海道における富士、王子各製紙の紙、パルプの販売量

	富 士 製 紙	王 子 製 紙
明治41年	52,247 (ポンド) (1)	—
" 42年	9,788,820 (") (187)	—
" 43年	14,921,327 (") (286)	8,193,041 (ポンド) (1)
" 44年	16,730,202 (") (320)	47,941,881 (") (6)

「北海道工業概況」(大正2年) p 25より作成()の中の数字は富士製紙、明治41年を1とした場合の販売量倍数、王子製紙、明治43年を1とした場合の販売量倍数

前述の通り釧路、天寧の製紙工場は富士製紙第四工場となり、この道内唯一の既存工場へ、アメリカ合衆国より最新式の機械を取付け、パルプ及び紙生産に拍車をかけるにいたった。明治末期の第四工場では男子工員120名、女子工員20名とし、第2表の通り年間原木消費量は5万石で釧路での年間木材総消費量132,000石の約38%に相当する。パルプの生産量は300万ポンド台から200万ポンド台前後に減少しているものの、新聞紙の製造が増加しているので、この工場での全生産量は増加したのである。さてこの工場での販売量であるが、詳細は不明であるが大半出荷されたと見てよい。

第1-B表は明治41年からの北海道における両製紙の販売量である。この表でみて富士製紙の場合も生産と平行して販売量も4年間に320倍と急増している事がよくうなずける。この4年間の全販売量は富士製紙4,100万ポンド⁽¹⁰⁾であるのに対し、市場への大きな力を持つ王子製紙は5,600ポンドとなり、この工場生産量より多くなっている。

木材工業では明治40年に釧路製材造船合資会社が西幣舞に誕生する。出資金5万円で、武富善吉と大井留八が無限責任社員となりそれぞれ14,000円と7,500円の出資をし、有限責任社員に福島甚吉、佐々木与兵衛がなり発足する。

第2表 明治末期までの釧路の木材消費工場

工場名	所在地	創立年	1年製造 (消費)量	原動力	職 男	女
共栄挽材所	釧路町大字釧路村	M 43	35,000本 (下駄・棒板)	1 (16HP)	7	1
釧路興業 釧路製材所	"	M 34	12,000石 (板・挽材)	1 (25HP)	23	—
草野製輪所	"	M 36	20,000石 (軸木)	1 (30HP)	52	73
釧路製材造船 合資会社工場	"	M 40	50,000石 (製材・造船)	1 (75HP)	60	3
富士製紙 第4工場	"天寧	M 35	50,000石 (白紙・連紙)	1 (100HP)	120	20
合 計			132,000石			

(釧路興業製材所は山泉製材所を指す。このほか釧路国管内には厚岸に北海挽材、宮城野、尾幌の3製材工場がある。表中合計は共栄挽材を含まない。本表は『釧路国史』p 49と『釧路国勢一瞥』p 95、「北海道工業概況」(〈明治42年などより作成〉)、『新釧路市史』第2巻収録)

この合資会社は自然港湾のまま、物資の搬出入量が増加する事で、本船が接岸出来ないための運搬船である舢舨の建造を主目的としたものである。造船所はモシリヤにおかれ、7千坪の用地に工場、倉庫、乾燥室をもうけた近代的設備をはこるものである。この工場では富士製紙第四工場につぐ75馬力の大型機関をそなえ、63人ほどの工員が働いている。第2表の通りこの工場での年と木材消費は5万石であり、この量は前述の製紙工場を二分した規模のものである。

工場使用の原木は松材をおもにセン、カツラなどの雑木を、釧路、阿寒の二河川流域から伐採し、川を流送搬入した。一般用材のほか多くは船材となり舢舨の建造をする。

また明治42年には木材流送で原木を入手しやすい西幣舞(釧路川岸)で、丸鋸2台を設置した長谷川木工場、翌43年には下駄、棒板生産のため16馬力の機関を持って工員8名の共栄挽材所が操業をはじめた。(第2表参照)このほか同じ頃、西幣舞に須藤木工場もできている。⁽¹¹⁾

このように釧路製材造船合資会社のほか小規模ではあ

るが、動力を持った木工場が輩出するにいたる。

造船業については明治40年代にはいり、沖合漁業の発達によって、魚を売さばく明治40年水産釧路魚採市場ができる。漁獲量の増大は当然の事ながら漁船増と符合する。沖合の漁に適したやや大型の無力船である川崎船の建造がさかんとなり、専門の小造船所が輩出して来る。明治末期までに山部造船所、鈴木造船所など5か所ほどの無動力漁船中心の造船所が誕生している。船材の大半は地元で入手したのであり、釧路川中・上流林より払下げし、川口の各造船所まで川をおろしてきたものをあてている。これらはみな船大工の手による家内労働を中心とした小経営のものである。

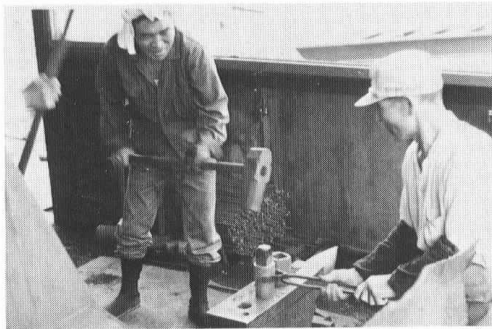


写真3 鉄工所

鉄工業（所）は、この期に零細な小鉄所群の発生をみたのである。詳細なデータはないが、明治末期までにいわゆる高橋鉄工所（入舟町）など農具や造材用具をつくる野鍛冶と州崎町に集中した太田、今西、富田、正置の各鉄工所など刃物鍛冶がある。もちろん造船に必要な船釘もつくっている。これらはホドを中心にフィゴ、作業台の金しき、万力、ハンマー、金ばさみなどの道具で注文品を生産するものであり、内地において修得してきた伝統的な技術を持って釧路で営業したのである。

水産加工業⁽¹²⁾は沖合漁業の発達により漁獲量の増大となるが、これにともない水産加工業の面でも大きな変化を生じる。

まずこれまでのような漁撈と加工の未分化な小加工が存在していたが、これとは別に独立した加工業として誕生した業体をここでみて置きたい。

それはまず明治40年、三ツ輪印釧路水産製造所の誕生がそれである。ここは石川重兵衛、池田栄太郎、山県象三の三者による合資会社である。工場は西幣舞におかれ、買付けによって集荷した原料である鮫や鮪の節を中心とする魚油などの食品加工生産が主である。工場には部分的に機械を導入しているが、全体としてマニユの生産方法で生産した製品は、国内ばかりでなく輸出にも振向け

られている。

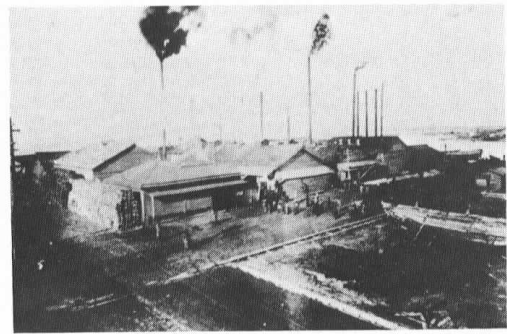
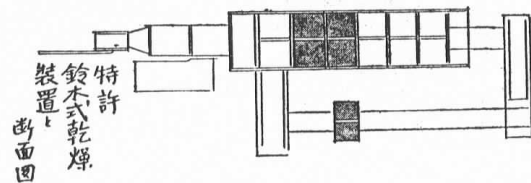
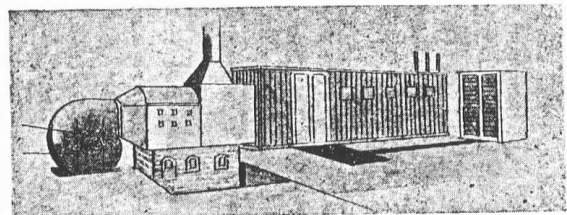


写真4 鈴木水産加工場



第2図 鈴木水産加工場の機械図 上 機械乾燥機全体図
下 同機械断面図

（『梢風名勝負物語』砂糠と醤油の項 p 312、なお、この本は鈴木五郎著『鈴木藤三郎伝』をもとにしている）

次に明治44年オダイトに鈴木藤三郎によって工場を建設し、営業を開始した鈴木水産加工場をあげなければならない。もともと鈴木は発明家であり、この年乾燥機械の発明をし、本州より移住し釧路で営業をする事になった。

これは低い原価で大量に仕入れた魚を大釜で煮上げて、送風器、熱風発生炉をつけ、ベルトで原料を送る機械乾燥機にかけて、良質の粉末魚粕とするものであった。もちろんこれで良質の魚油生産をすると共に、精製した魚粉肥料が生産できたので、三ツ鱗印の商標で国内の米作地帯へむけて販売したのである。⁽¹³⁾

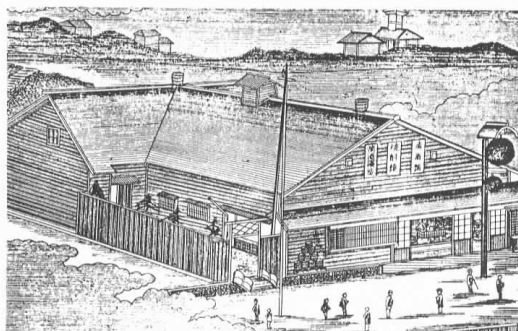
やがてさらに量産するために、買付原料ばかりでなく、会社で自家用の動力船を持って原料の集荷をはかるようになる……………。

註(1)田中 修「大正期における北海道工業の展開」(『経済論集』第30巻2号：昭和47年9月)のほか、『日本産業史大系2、北海道地方篇』（地方史研究協議

会)などの成果がある。しかし具体的な地域における発達段階上の格差の実態把握作業は今後の課題となっている。

(2)高崎龍太郎著『北海立志図録』(明治23年刊)

明治20年代初期のものをさぐるものとして、史料性の高いものであり、これより釧路の加工業をピックアップしてある。



第3図 須田醸造



第4図 酒井酒造

(3)寺島敏治「一枚のアイヌ流送写真」(北教大史学会編「史流」第12号 p 60) マッチ軸木生産については全道的な流れを釧路もたどっていると見れる。

(4)『北海道山林史』 p 684

(5)寺島敏治「釧路地方に於ける原木加工史(1)」(「釧路市立郷土博物館報」No.203号:1970年3月 pp2-6)

(6)当時の国有林大地積取得者は前田栄次郎のほか、中村定三郎、水口常吉、小島隈太郎など多数(どれも30万坪以上)釧路在住者でもあげる事ができる。な

お前田牧場の場合、141万坪で立木が69,000本ある。釧路支庁「明治33年度処分法第3条、未開地貸付書類」による。

(7)布施 正編『釧路市東部漁業協同組合史』pp 97-98

当時、昆布生産は大半、仕込み商の手中にあった。生産人は米増の仕込みを受けて昆布をかたにとられる状態であったが、沃度や加里原料(素沃度)も仕込みの対象となったところもあるが、昆布より少額でしかなく、多くは現金収入となっている。

(8)北海道庁「北海道工業概況」 p 24

(9)『釧路国便覧』、「釧路国勢一斑」など関係分参照

(10)北海道庁「北海道工業概況」(大正2年) p 25

(11)『新釧路市史第2巻』 p 711

(12)ホド前・石黒直次(明治32年生、池田町出身で大正2年来釧)氏よりききとりによる。(昭和47年8月)

石黒氏は来釧後、釧路の立花鉄工所で1人前の職人となり、年季あけ後は小林鉄工所でホド前で働らき、その後も辻村鉄工所で仕事をしていた。

(13)『新釧路市史第2巻』 pp 24 p-250

『梢風名勝負物語』 pp 316-319

付記

本来であるならば釧路の工業発達の実態から、第四期までを本号に収録すべきであるが、次号まわしとした。そこでここでは第四期と第五期の展望を一言だけふれておきたい。第四期はちょうど釧路も第一次大戦の好景気をむかえ、各工業はどれも活況を呈し、拡大再生産の一途をたどる。これでいわゆる大きな変革期をむかえる事になる。ただ地元で最大の工業生産をはこる富士製紙第四工場は大正2年に焼失し、好景気の最中は鳥取に新工場の用地を求め、建設中であった点を見落してはならない。

次の第五期はいわゆる戦後恐慌期をむかえて、不況の中で再編成が進む。釧路では会社・工場の閉鎖、倒産という現象も見られ、一般に生産は縮小にむかう。そして釧路では「再編成」が「系列化」として具現する事に注目しなければならない。

—未完—